

田園調布学園大学大学院人間学研究科 子ども人間学専攻教職課程履修規程

(目的)

第1条 この規程は、田園調布学園大学大学院学則（以下「学則」という。）第37条に基づき、田園調布学園大学大学院人間学研究科（以下「本研究科」という。）における教職課程の履修に関し、必要な事項を定める。

(免許状の種類)

第2条 本研究科において取得できる教育職員免許状の種類は次のとおりとする。

子ども人間学専攻

幼稚園教諭専修免許状（以下「免許状」という。）

(免許状授与の所要資格)

第3条 免許状授与の所要資格を取得しようとする者は、学則第40条に定める修士課程を修了し、かつ、教育職員免許法（平成28年法律第87号）及び同法施行規則（平成29年文部科学省令第41号）に定める所要の単位を修得しなければならない。

2 前条に規定する免許状を取得しようとする者は、学士の学位を有し、幼稚園教諭一種免許状を取得していることを原則とする。

(授業科目及び所要の単位)

第4条 教職課程は、教科に関する科目、教職に関する科目に区分し、別表の授業科目の中から所要の単位を修得するものとする。

(履修登録)

第5条 教職課程の授業科目を履修しようとする者は、所定の期間において履修登録を完了しなければならない。

(成績評価及び単位の認定)

第6条 教職課程の授業科目に係る成績評価及び単位の認定については、学則第39条及び第40条を準用する。

(科目等履修生)

第7条 学則第48条により、教職課程の授業科目の履修を希望する者がいるときは、教授会の議を経て、学長が科目等履修生として履修を許可することができる。

(免許状の授与申請)

第8条 第3条第1項及び第4条の規定により、所要の単位を修得した者は、一括または本人により、都道府県教育委員会に免許状授与の申請ができるものとする。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

附 則

1 この規程は、平成31年4月1日から施行する。

2 第3条に規定する教育職員免許法及び同法施行規則及び第4条に規定する別表は、施行日の前日に在籍する学生には適用せず、なお従前の例による。

附 則

- 1 この規程は、令和3年4月1日から施行する。
- 2 改正後の第4条に規定する別表の授業科目のうち「児童家庭福祉特論」は施行日の前日に在籍する学生には適用せず、なお従前の例による。

別表（第4条関係）

免許法施行規則に定める科目区分	授業科目名	配当年次	単位数		備 考
			必 修	選 択	
教科に関する科目	子どもとアート論	1・2前		2	左記授業科目から 24単位以上選択履修
	子どもとことば論	1・2後		2	
教職に関する科目	教育的ケアリング特論	1・2後		2	
	学び学特論	1・2後		2	
	保育学特論	1・2前		2	
	子ども思想史特論	1・2後		2	
	保育実践研究	1・2後		2	
	保育者特論	1・2前		2	
	子ども・子育て支援実践研究	1・2後		2	
	児童家庭福祉特論	1・2前		2	
	家族社会学特論	1・2後		2	
	子ども政策特論	1・2後		2	
	教育学特殊研究	1・2前		2	
	子ども環境学特論	1・2後		2	
	発達心理学特論	1・2前		2	
保育・教育課程研究	1・2後		2		

科目名	子どもとアート論	副題	
担当者	安村 清美・斉木 美紀子（オムニバス・一部共同）		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>子どもの育ちを見通した時、アートに潜む創造的経験のプロセスに実践的学びとしての意味を見出すことができる。人間としての子ども期のアート経験が、その育ちにもたらす意味、特に保育現場におけるすべての子どものためのアート教育の可能性について、個別のアートの独自性及びトータルな識見をもてるよう、理論と実践を往還しながら研究する。</p> <p>安村担当の講義では、子ども期のアート経験の意味について考え、その上で、舞踊家と教育現場の関わりと実践を通して、アートとして舞踊がもつ教育的意味について考察する。また、表現する身体について、身体を通して表現し人と共振することとは何か、その意味について芸術教育に関わる文献と事例を合わせて探究する。</p> <p>斉木担当の講義では、音楽表現の視座から子どもの表現を捉え、表現の土台となる環境や経験について考え、表現する主体としての自分についても探究しながら、アート教育についての理解を深めていく。</p> <p>その上で、担当者共同による講義では、子どもがアートに出合い経験することの意味について、上記の内容から個々の学生の学びを基にプレゼンテーション及びディスカッションを行う。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 幼児期の子どもにとって、アートと出合い経験することがもたらす意味について、実践記録や研究を通して多様な視点から考察できるようになる。</p> <p>2. 幼児期のアート経験の特徴として、その総合性に着目し、保育者としての総合的なプランニング力、実践力を修得する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	「子どもとアート」について（人間としての子ども期のアート経験の意味）（安村・斉木）		
2	教育現場とアーティストの関わり①—子どもの育ちに関わる意味と可能性について（安村）		
3	教育現場とアーティストの関わり②—共振する身体：子どもの身体表現とコミュニケーション（安村）		
4	表現する身体：保育現場における子どもの身体とアート—実践記録を読む（安村）		
5	表現する身体：表現とプロセス、作品—実践記録、論文を読む（安村）		
6	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味①ディスカッション（安村）		
7	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味②実践・事例報告（安村）		
8	子どもの音楽表現の芽生えと学び（斉木）		
9	子どもと音環境（斉木）		
10	子どもとうた（斉木）		
11	子どもと楽器①民族楽器にふれる（斉木）		
12	子どもと楽器②楽器と関わる子ども（斉木）		
13	文化と子ども（斉木）		
14	課題のプレゼンテーション・ディスカッション（安村・斉木）		
15	課題のプレゼンテーション、まとめと講評（安村・斉木）		
期末			
授業に関する連絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習形式で授業を行う。実践を含む演習では、履修生に実践課題を課することがある。第4回～第7回、第9回～第15回の授業では、講義に関連した課題についてレポートをし、プレゼンテーションとディスカッションをしながら内容を深めていく。		
評価方法及び評価基準	小レポート（30%）、実践課題（30%）、プレゼンテーション（40%）を基に総合的に判断する。		
事前・事後学習の内容	事前学習として、自分自身が経験し、また保育現場で出合ったアート教育の課題を考える。さまざまなアートに親しみ、関心をもつ。事後学習として、各回の学習内容をまとめ、次回授業の課題準備につなげる。		
履修上の注意	実践を含む授業なので、指示に留意し、実践に適した服装で授業に臨むこと。		
テキスト	特になし		
参考文献	<p>『松本千代栄撰集 2 人間発達と表現』舞踊文化と教育研究会（編者代表：安村）編、2007、明治図書</p> <p>『13歳からのアート思考』末永幸歩、2020、ダイヤモンド社</p> <p>『保育の中のアート』磯部、福田、2015、小学館</p> <p>『子どもたちの創造力を育む—アート教育の思想と実践』佐藤、今井編、2003東京大学出版会</p> <p>『表現者として育つ』佐伯、藤田、佐藤編、1995、東京大学出版会</p> <p>『音楽を学ぶということ』今川、2016、教育芸術社</p>		

科目名	子どもとことば論	副題	多文化共生時代の子どもとことば		
担当者	内藤 知美 (実)				
開講期	後期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>子どもの総合的発達におけることばの問題について、0歳から就学前までの時期の子どものことばの発達過程とことばの獲得に関わる社会・文化環境について理解を深める。家庭、幼稚園、保育所などの生活における子どものことばに関わる多様な事例を通して、子どもの生活や遊びと大人―子ども関係、子ども同士の関係がことばの発達にどのように相互に影響するのか、関係論的視点から検討する。また子どもを取り巻く社会・文化環境の変化、例えば乳幼児期からの視聴覚メディアの受容、日本語を母語としない子どもの増加、言葉の関わりのもちにくい子どもの問題など、子どもとことばを取り巻く今日的課題を捉える視点をもつことが目標である。また絵本などの児童文化財と子どもの関わりを探究し、実際の保育において子どものことばを育てることの意味を理解する。</p>				
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもが多様なかわりの中でことばを獲得していく過程について理解を深める。特に子どもが主体的にことばを使用することに着目し、ことばの獲得における「教え―教えられる」保育・教育の枠組みを問い直す。</p> <p>2. ことばをめぐる理論の動向を踏まえるとともに、具体的な事例を通して、現代社会に生きる子どものことばの発達を問い、具体的かつ実践的視点から子どものことばが育つこと、そしてことばを育てることの意味を探究する。</p>				
授業の方法・授業計画					
1	子どもとことばの関係性				
2	子どもとことばをめぐる社会環境・文化環境				
3	ことばの発達と保育 (0歳期)				
4	ことばの発達と保育 (1語発話の時期)				
5	ことばの発達と保育 (2語発話の時期)				
6	ことばの発達と保育 (2歳期・3歳期)				
7	ことばの発達と保育 (4歳期・5歳期)				
8	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助①―多文化・多言語と子ども				
9	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助②―ことばとコミュニケーション (ビデオカンファレンスを通して)				
10	事例検討：同調、リズムとことば				
11	事例検討：共感性とことば				
12	事例検討：創造性や思考とことば				
13	ことばを育てる児童文化財の活用①―絵本などの児童文化財とことばの関係性				
14	ことばを育てる児童文化財の活用②―文化財を用いた子どものことばの育ちあい				
15	子どものことばと視聴覚メディア				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と毎回のグループディスカッションによる演習形式で行う。演習では、文献講読および実践事例を基にした双方向・多方向からのディスカッションを行うため、レジュメを担当者は作成すること。				
評価方法及び評価基準	小論文 (レポート) 50%、期末課題 50%				
事前・事後学習の内容	子どもとことばの発達をめぐる新しい理論、研究を随時紹介するので、関連する資料を熟読すること				
履修上の注意	保育事例検討では受講生が自ら考え、積極的に発言することを望む。また「子ども」や「ことば」に関する関連文献を読み、学びを深めることを期待する。				
テキスト	今井むつみ(2013)『ことばの発達の謎を解く』(ちくまプリマー新書)、幼稚園教育要領(平成29年告示)、保育所保育指針(平成29年告示)、幼保連携型認定こども園教育・保育要領(平成29年告示)				
参考文献	岡本夏木(1982)『子どもとことば』(岩波新書)、麻生武(1992)『身ぶりからことばへ』(新曜社)今井むつみ(2010)『ことばと思考』(岩波新書)、『発達 特集子どものことば、再発見! 172号』(ミネルヴァ書房2022)など授業中に適宜指示する。				

科目名	教育的ケアリング特論	副題	
担当者	吉國 陽一		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>社会的な動物である人間にとってケアリングは生きることの根底にある営みと言える。一方で、ケアリングは生産優位の産業社会の中で女性というジェンダーに結び付けられながら、シャドウ・ワーク（支払われない仕事）としてその価値を貶められてきた経緯がある。文化人類学者のデヴィット・グレーバーによれば、全ての労働は本来、他者をケアしながら社会に貢献するという意味でケアリング労働であるが、生産としての労働からケアリング的側面が排除されたという。その結果、社会的価値のないブルシット・ジョブ(クソみたいな仕事)の増殖と、保育や福祉、教育など本来社会的価値がある仕事のシット・ジョブ(クソ扱いされる仕事=労働条件の劣悪な仕事)化を招いているとグレーバーはいう。</p> <p>本授業では上記のような背景を踏まえて、保育・教育をより人間的な営みとして再解釈し、編み直す上でケアリングの理論がもつ可能性について理解を深めることを目指す。第2～4回はミルトン・メイヤロフの『ケアの本質』を購読し、ケアリングの基本的な特徴について議論する。第5回から11回はジェーン・ローランド・マーティンの『スクールホーム—<ケア>する学校』を購読し、ケアリングを含む3C（Care=ケア、Concern=関心、Connection=つながり）の観点から幼児教育・初等教育のあり方について議論する。第12回～15回はネル・ノディングズの『幸せのための教育』を購読し、ケアリングの視点を踏まえて保育・教育の目的について議論する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ケアリングの概念とケアリングを取り巻く現代の社会的コンテクストが理解できる。 ・ケアリングという行為の意味とそれを構成する要素について理解できる。 ・マーティンの3C（Care=ケア、Concern=関心、Connection=つながり）に基礎を置くスクールホームの構想について理解できる。 ・ノディングズの幸せを目的とする教育の含意と意義を理解できる。 ・ケアリングの観点から受講者それぞれの実践を再解釈することができるようになる。 		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション		
2	文献購読① 『ケアの本質—生きることの意味』 - 他者の成長を助けることとしてのケア -		
3	文献購読② 『ケアの本質—生きることの意味』 - ケアの特質 -		
4	文献購読③ 『ケアの本質—生きることの意味』 - ケアは生に何をもたらすか -		
5	文献購読④ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 私的領域と公的領域 -		
6	文献購読⑤ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 学校と家庭 -		
7	文献購読⑥ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 文化とカリキュラム -		
8	文献購読⑦ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 3Cと中庸の徳 -		
9	文献購読⑧ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 抑圧された家庭的事柄 -		
10	文献購読⑨ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 家庭と世界 -		
11	文献購読⑩ 『スクールホーム—<ケア>する学校』 - 3Cと保育・教育 -		
12	文献購読⑪ 『幸せのための教育』 - 幸せとは何か? -		
13	文献購読⑫ 『幸せのための教育』 - 苦しみと不幸せ -		
14	文献購読⑬ 『幸せのための教育』 - ニーズと欲求 -		
15	文献購読⑭ 『幸せのための教育』 - 幼児教育・初等教育の目的を問う -		
期末			
授業に関する連絡	第2回～15回の授業は全て、双方向・多方向に行われる討議を伴う授業（文献購読に基づく各自のレジュメの検討とグループディスカッション）により行う。 文献購読にあたり、各自に作成してもらったレポートには授業の中でコメントを行う。		
評価方法及び評価基準	毎回の授業で提出する小レポート（70%）及び授業におけるディスカッション（30%）により評価を行う。		
事前・事後学習の内容	毎回の授業で扱う文献の該当箇所を読み、自分の実践や研究上の関心に照らして考察したレポートを作成する。 毎回の授業内容について復習をする。		
履修上の注意	自分の実践や研究テーマに照らし、問題意識をもって毎回のディスカッションに参加することを期待する。		
テキスト	ジェーン・R・マーティン 生田久美子監訳『スクールホーム—<ケア>する学校』 東京大学出版会、2007年 ネル・ノディングズ 山崎洋子監訳『幸せのための教育』 知泉書館、2008年 ミルトン・メイヤロフ 田村真・向野宣之訳『ケアの本質—生きることの意味』 ゆみ出版、1987年		
参考文献	デヴィッド・グレーバー s酒井隆史他訳『ブルシット・ジョブ クソどうでもいい仕事の理論』 岩波書店 2020年 ジェーン・R・マーティン 村井実他訳『女性にとって教育とはなんであったか—教育思想家たちの会話』 東洋館出版社 1987年 広井良典『ケア学 越境するケアへ』 医学書院 2000年 ジョアン・C・トント 岡野八代訳・著『ケアするのは誰か？ 新しい民主主義のかたちへ』 白澤社 2020年 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレール館 2018年 文部科学省『小学校学習指導要領』東洋館出版社 2018年 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』 東洋館出版社 2018年 ネル・ノディングズ 佐藤学他訳『ケアリング 倫理と道徳の教育—女性の観点から』 晃洋書房、1997年 ネル・ノディングズ 佐藤学他訳『学校におけるケアの挑戦—もう一つの教育を求めて』 ゆみ出版、2007年 徳永哲也『正義とケアの現代哲学』 晃洋書房 2021年		

科目名	学び学特論	副題	
担当者	生田久美子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	「学ぶ」ということ、「知る」ということ、また「理解する」ということは同義であるか？違いがあるとするならば、それらはどのような関係にあるのか？本講義では、哲学、認知科学(心理学を含む)の学問領域における「学び論」の系譜を辿りながら、新しく生まれ変わり、発展してきている人間学の一領域としての「学び論」に焦点をあてて考察する。最終的に、人間学的観点から発展させた「学び論」を提示する。		
授業のねらい・到達目標	1・「学ぶ」ということと「知る」ということの違いを理解する。 2・「学び観」を構成している「能力」「知識」「上達」「育つ」「ひらめく」という概念を理解し、「学び」と「教育」との関係を理解する。 3・人間学的観点からの「学び論」を自らが生成・吟味し成果を発表する。		
授業の方法・授業計画			
1	「学び」と「情報の獲得」との違い		
2	「学び」と「知る」や「知識」との違いへの注目		
3	『私たちはどう学んでいるのか』を通して6つのテーマについて考えることの意味。		
4	①「能力」とは何か		
5	①「能力」とは何か		
6	②「知識」とは何か		
7	②「知識」とは何か		
8	③「上達」とは何か		
9	③「上達」とは何か		
10	④「育つ」とは何か		
11	④「育つ」とは何か		
12	⑤「ひらめく」とは何か		
13	⑤「ひらめく」とは何か		
14	⑥「教育」とは何か		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	毎回、最後の10分で授業についての質問、コメントを「リアクション・ペーパー」に書いて提出する。		
評価方法及び評価基準	講義の区切れ目で、レポートを提出する(50%)。講義の最後には講義全体を振り返ってのレポートを提出する(50%)。それらを基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	講義の展開過程で逐次、参考文献を紹介するので、できるかぎりそれらを事前に読むことが求められる。		
履修上の注意	全講義に出席のこと		
テキスト	鈴木宏昭著『私たちはどう学んでいるのか』筑摩書房2022		
参考文献	J.レイヴ&E.ウェンガー著佐伯 胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書、1993年		

科目名	保育学特論	副題	
担当者	内藤 知美 (実)		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>子どもは多様な関係性の中で学び、育つ存在である。また保育という営みは、子どもだけではなくそこに関わる保護者や保育者、そして地域、社会の学び、育ちと深く関わる。社会文化的視点から、多様で複雑な状況や文脈において生成される人間の「学び」や「育ち」を捉えるための視座を得るとともに、子どもが今を生きる「保育フィールド」の力動性や構造を読み解く方法について検討する。現在、「子ども人間学」と通底する観点から、保育を構築しようとする動きが生まれている。ニュージーランドの「テファリキ」を始めとする海外の保育の動向を捉えながら、多様で複雑な歴史、文化、社会が織り成すダイナミズムの中で、子どもが学びに向かう力や人間性を育むプロセスとそこに関わる人々（保育者、保護者等）のあり様を探究する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるまなざしを問い直し、子どもが今を生きる場（保育フィールド）の構造や力動性を捉えるための視点を学ぶ。また保育フィールドで生成する多様で多層なことがらについての具体的な事例を検討することで、それらが子どもの学びや育ちにいかに関わるのか、その「意味」を解釈する様々な視点を学ぶ。</p> <p>2. 海外の保育の動向から、子どもを起点に、保育にかかわる多様な人々が学び、変容するプロセスを捉える。そのことを通じて、保育が有する豊かな資源と新たな社会のあり方を構想する可能性を探る。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	保育のまなざし—教える、教えられる—		
2	子どもか子どもたちかという「問い」		
3	子どもの学びと育ちを捉える（1）発達と育ち		
4	子どもの学びと育ちを捉える（2）社会文化的アプローチ		
5	保育フィールドの構造と理解		
6	遊びを通じた保育（1）事例検討：身体的であること		
7	遊びを通じた保育（2）事例検討：共同的、協働的であること		
8	子どもに対する気づき（1）事例検討：なぜ気づくのか		
9	子どもに対する気づき（2）事例検討：枠組みの再構築		
10	保育における対話と同僚性		
11	保育実践と構造（1）：NZのテファリキの原理		
12	保育実践と構造（2）：NZの学びの物語と評価		
13	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（1）：学びあい		
14	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（2）：世代間循環		
15	まとめ：保育の課題と展望		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と毎回のグループディスカッションによる演習形式で行う。演習では、文献講読および実践事例を基にした双方向・多方向からのディスカッションを行うため、レジュメを担当者は作成すること。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業中に適宜参考文献を紹介する。事前学習としては、参考文献を読んで授業へ臨むこと。また、事後学習としては、授業の内容を振り返り、さらに関連・関心のある参考文献を読み込み、自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマ・関心から授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	川田学(2019) 『保育的発達論のはじまり』 ひとなる書房 マーガレット・カー・ウェンディ・リー著(2020) 『学び手はいかにアイデンティティを構築していくか』 ひとなる書房 マーガレット・カー著大宮勇雄・鈴木佐喜子訳(2013) 『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』 ひとなる書房		
参考文献	入江礼子・友定啓子編(2015) 『津守眞講演集 保育の現在-学びの友と語る-』 萌文書林 佐伯胖編(2017) 『「子どもがケアする世界」をケアする』 ミネルヴァ書房 日本保育学会編(2016) 『保育学講座 I 保育学とは一問いと成り立ち』 東京大学出版会		

科目名	子ども思想史特論	副題	
担当者	杉下 文子		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>「子ども（幼児）」という存在は、教育思想史の中でどのように捉えられていたのであろうか。本講では「子どもの発見者」といわれるJ. J. ルソーの教育論『エミール』をひもとき、ルソーは何を「発見」したのかを考察する。授業では、ルソーの教育論やそれが持つ教育思想史上の意義について講義をするとともに、演習形式で『エミール』の第1、2編を読み、ルソーが語る「子ども」を受講生自身にとらえてもらう。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・「子どもの発見」とはどのようなことかを理解する。 ・教育学の古典に親しむ。 ・西洋近代教育の礎を作ったとも言われるルソーの思想と、その後世への影響について理解する。 ・現代社会における「子ども」や私たちの持つ子ども観を客観視することで捉え直し、子どもたちを育む保育や教育活動のあり方について考察を進めることができる。 		
授業の方法・授業計画			
1	オリエンテーション		
2	ルソーの教育論についての基礎知識①		
3	ルソーの教育論についての基礎知識②		
4	『エミール』序を読む		
5	『エミール』第1編を読む①		
6	『エミール』第1編を読む②		
7	『エミール』第2編を読む①		
8	『エミール』第2編を読む②		
9	『エミール』第2編を読む③		
10	『エミール』第2編を読む④		
11	『エミール』第2編を読む⑤		
12	『エミール』第3編概観		
13	現代におけるルソーの教育観・子ども観の意義（発表）①		
14	現代におけるルソーの教育観・子ども観の意義（発表）②		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	授業は、講義と演習を組み合わせで行う。演習では、受講者にレジュメを作成して、発表してもらう。受講生の都合によってはオンライン形式で行う。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回の小レポート（50%）及び発表（50%）を基にして評価する。		
事前・事後学習の内容	『エミール』の序および第1編は開講前に読み、疑問点や意見を整理しておくことが望ましい。第2編は受講生の発表で進めるが、担当しない場合にも範囲をよく読んで授業に臨むことが求められる。また、授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすることが望まれる。		
履修上の注意	授業内の議論に対する積極的な参加を求める。		
テキスト	ルソー著、今野一雄訳『エミール』上巻、岩波文庫（第74版改版以降の版を用意すること）		
参考文献	ルソー著、今野一雄訳『エミール』中巻、下巻、岩波文庫 ルソー著、桑原武夫・前川貞次郎訳『社会契約論』、岩波文庫 今井康夫編、『教育思想史』有斐閣アルマ、2009年		

科目名	保育実践研究	副題	
担当者	高嶋 景子		
開講期	前期(隔年)	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>「保育」という営みを探究していくためには、その実践的課題を、個々の保育者や子どもの持つ「能力」や「技術」の問題としてではなく、その「実践」に関わる多様な他者やモノ、環境等との関係の中で多層的に捉える視座が必要となる。そのように多層的に保育の営みを捉えながら、「子ども人間学」的観点に立って、自らの実践を省察していくまなざしを獲得していくため、本授業では、一人一人の受講者が実践的な場におけるフィールドでの観察や自らの実践を通して得た事例を基に、そこから見出される課題を共有し、「質の高い実践」とは何か、その在り方や構造について検討し、探究していく。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>保育という営みにおける具体的な事例のなかから、そこで問われるべき実践的課題を抽出し（「問い」を見出し）、それらを周囲の多様な他者やモノ、環境等との関係の中で適切に「問う」ことのできる視座を獲得していくと同時に、その視座を基に、子どもの育ちやその育ちを支える保育の在り方について探究していくことを目的とする。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	「子どもをみる」ということ①～子どもをみるまなざしを規定する子ども観・発達観/自らの枠組みへの気づき～		
3	「子どもをみる」ということ②～「子どもを共感的にみる」ということの意味～		
4	「子どもをみる」ということ③～「子どもの育ちをみる」ということ/共感的理解を妨げるもの～		
5	実践事例研究Ⅰ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く関係構造への着目～		
6	実践事例研究Ⅰ②～各自の事例報告と討議：「気になる子」を生み出す関係構造～		
7	実践事例研究Ⅰ③～各自の事例報告と討議：子どもの「遊び」と仲間集団～		
8	実践事例研究Ⅰ④～各自の事例報告と討議：「遊び」を支える活動媒体としての「モノ」への着目～		
9	保育という営みを問い直す①～「ある」から「なる」を支える保育とは～		
10	保育という営みを問い直す②～「子どものケアする世界をケアする」ということの意味～		
11	実践事例研究Ⅱ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く実践共同体への着目～		
12	実践事例研究Ⅱ②～各自の事例報告と討議：保育の場における実践共同体の持つ多層性～		
13	実践事例研究Ⅱ③～各自の事例報告と討議：実践共同体の「境界」とその柔軟性の持つ意味～		
14	実践事例研究Ⅱ④～各自の事例報告と討議：子どもの育ちを支える保育者のまなざしと援助～		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	<p>本授業は講義と演習の両形式で行う。第5～8回、第11～14回は、受講者自らの観察事例もしくは実践事例と、その事例に対する考察の発表を行い、それらに対する討議を中心に授業を展開していく。それらの事例報告と討議を通して、各自の研究課題の発見や実践を読み解くための多角的な視点の獲得に繋げていくことを目指す。</p>		
評価方法及び評価基準	<p>授業内の発表や討議（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。</p>		
事前・事後学習の内容	<p>授業において、実践的な場におけるフィールドでの観察、もしくは、自らの実践を通して得た事例、および、その事例に対する考察の発表を行うため、それらの事例の収集と検討を行うこと。また、授業後は、授業時の他の事例の発表や討議の振り返りを十分に行い、自分なりの考察を深めていくこと。</p>		
履修上の注意	<p>実践事例の収集のために保育現場での観察等が必要となる場合、対象園の選定や依頼については、事前に授業担当教員へ相談すること。</p>		
テキスト	未定		
参考文献	<p>子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2013年 岸井慶子著『見えてくる子どもの世界—ビデオ記録を通して保育の魅力を探る—』ミネルヴァ書房、2013年 大宮勇雄著『学びの物語の保育実践』ひとなる書房、2010年 柴山真琴著『子どもエスノグラフィー入門—技法の基礎から活用まで—』新曜社、2006年</p>		

科目名	保育者特論	副題	
担当者	高嶋 景子		
開講期	前期(隔年)	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>子どもが主体となって自ら学ぶプロセスをして展開される保育においては、常に、予想外の出来事が生じ、刻々と状況が複雑に変化していく。保育者は、そのような複雑な状況と対話しつつ、眼前の子どもの思いや課題を丁寧に探り、その育ちを支える関わりや活動の在りようを検討し、実践していくことが求められる。そうした保育者の専門性は、D.ショーンの指摘するように、体系的な知識や法則を適用して問題を解決するような「技術的合理性」によって成り立っているものではなく、「反省的实践家」として、その在りようを読み解いていく必要があると考えられる。本講義では、そうした保育者の専門性について探究するため、まずは、「保育」という営みや、そこでの子どもの学びや育ちを理解するための視座を検討し、それを踏まえて、保育者の専門性と、その専門性の深まりを支える「省察」のプロセスと周囲の関係構造について考察していくこととする。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるための保育者のまなざしの在りようを探ると同時に、それらの「学び」や「育ち」を支える保育実践の構造と、それを実践する保育者の専門性を読み解くための様々な視点を学ぶ。 2. 保育者の専門性が深まっていく過程と、その過程を支える周囲の関係構造について探究していくための問いの持ち方、考え方を獲得する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	保育者の専門性に関する研究の動向（1）～歴史の変遷を辿る～		
3	保育者の専門性に関する研究の動向（2）～近年の研究動向を探る～		
4	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（1）～個体能力論から関係論的アプローチへの転換～		
5	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（2）～保育者を取り巻く多様な関係構造への着目～		
6	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（3）～正統的周辺参加論とは～		
7	「保育者になるということ」（1）～「子どもの声を聴く」とは～		
8	「保育者になるということ」（2）～子どもがケアする世界をケアするために：鑑識眼的なまなざし～		
9	「保育者になるということ」（3）～子どもがケアする世界をケアするために：保育における即興性～		
10	「保育者になるということ」（4）～子どもと保育者の相互主体性～		
11	保育者の学びを支える多様な対話（1）～省察的实践家としての保育者の専門性～		
12	保育者の学びを支える多様な対話（2）～事例を通して読み解く「省察」の生成過程～		
13	保育者の学びを支える多様な対話（3）～「省察」を引き出す保育カンファレンスの意義と役割～		
14	保育者の学びを支える多様な対話（4）～対話のもつ「多声性」への着目～		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献購読及び実践事例を基にした討議を行うためのレジュメの作成の担当を課す。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分に自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探究心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。		
テキスト	未定		
参考文献	<p>子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013 倉橋惣三著『幼稚園真諦』フレーベル館, 1998 佐伯胖編著『「子どもがケアする世界」をケアするということ』ミネルヴァ書房, 2017</p>		

科目名	子ども・子育て支援実践研究	副題	
担当者	犬塚 典子		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	子ども・子育て支援の実践について、前半は、家族の機能について理論的な学習を行い、OECD諸国の動向についてカナダに焦点をあてて討議する。後半は、日本の新聞、自治体広報など各種メディアの記事を共同で分析し、子育て支援実践のための理論、政策、財政のありかたについて検討する。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本の子ども・子育て支援施策の変遷および現状について理解する。 2. 海外における施策や実践との比較から、日本の子ども・子育て支援制度の内容について理論的・実証的に分析する視点を身につける。 3. 現代社会の子ども・子育て環境やその実際について研究的な問題意識をもつようになる。 		
授業の方法・授業計画			
1	家族の機能について考える（1）マードックの核家族の4機能		
2	家族の機能について考える（2）ポルトマンの仮説「生理的早産」		
3	家族の機能について考える（3）保育・幼児教育の市場化		
4	子ども・子育て支援と家族・ジェンダーの多様化：海外の絵本を読む		
5	子ども・子育て支援に関する海外の枠組：カナダの大学テキストを読む		
6	OECD諸国における子ども・子育て支援		
7	カナダにおける子ども・子育て支援		
8	日本の子ども・子育て支援政策の変遷ならびに現状についての討議		
9	日本の子育て支援施設の訪問・見学		
10	日本の子ども・子育て支援事例の検討（1）事業所内保育施設についての討議		
11	日本の子ども・子育て支援事例の検討（2）幼稚園・保育所・認定こども園についての討議		
12	日本の子ども・子育て支援事例の検討（3）病児・病後児保育についての討議		
13	日本の自治体が行う政策事例に対する討議（1）		
14	日本の自治体が行う政策事例に対する討議（2）		
15	子育て支援すごろくの作成		
期末			
授業に関する連絡	全回を通じて子ども・子育て支援に関する課題発見・解決型の学習活動を行う。第8回～第15回は学生による発表と討議、実地見学、ワークショップを行う。		
評価方法及び評価基準	毎回の討議への貢献度を総合して評価する。		
事前・事後学習の内容	国内の政策や実践例について情報収集および整理を常に行うこと。また、毎回の授業内容を参照しつつ各自の課題研究を進めること。		
履修上の注意	課題発表のために授業時間外での研究調査を必要とする。		
テキスト	配布資料を中心に進める。		
参考文献	OECD『OECD保育白書』明石書店、2011年。		

科目名	児童家庭福祉特論	副題	
担当者	篠原 拓也		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>当授業では、社会福祉ないしソーシャルワークとは何かという基本的な問題意識の上で先行研究を概観しつつ、児童家庭福祉の議論に臨む。</p> <p>「子ども（児童）」「親」「家庭（家族）」などの児童家庭福祉に関する基本的な概念を、社会福祉の歴史に照らして再考しつつ、その上で市区町村や児童相談所、学校などにおける社会福祉やソーシャルワークの意義と課題について考察することを目的とする。特に当授業では、児童福祉司とスクールソーシャルワーカーを例に、社会福祉専門職における、さまざまな社会的機能に対して批判的に考察する力を身に着ける。</p> <p>また、修士論文等を意識して、論文の作成に係る基本的知識・技術・倫理について学習する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「子ども」「親」「児童」など、児童家庭福祉に関する基本的な概念を、社会福祉の歴史に位置づけて理解できる。 2. 児童家庭福祉領域の社会福祉ないしソーシャルワークの意義と課題を、歴史的・現代的な視点から考察できる。 3. 児童家庭福祉に関する先行研究を読み解き、批判的に考察するとともに、自身の研究上の関心を当該の学問体系や先行研究に結びつけて構想・設計できる。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス：授業の進め方		
2	社会福祉学および児童家庭福祉、児童ソーシャルワーク		
3	「子ども」「親」「家庭」の概念1		
4	「子ども」「親」「家庭」の概念2		
5	「子ども」「親」「家庭」の概念3		
6	児童家庭福祉領域の専門職の機能と意義		
7	児童家庭福祉における論文の構成方法1：学問体系上の位置づけ		
8	児童家庭福祉における論文の構成方法2：先行研究の渉猟と分析		
9	各自の研究の進捗、文献紹介、ディスカッション1		
10	各自の研究の進捗、文献紹介、ディスカッション2		
11	各自の研究の進捗、文献紹介、ディスカッション3		
12	各自の研究の進捗、文献紹介、ディスカッション4		
13	各自の研究の進捗、文献紹介、ディスカッション5		
14	各自の研究の進捗、文献紹介、ディスカッション6		
15	まとめ：学術論文に関する構想・到達点へのフィードバック		
期末			
授業に関する連絡	講義と演習を適宜、組み合わせて行う。第7回から15回は、履修生がレジュメを作成し、ワークショップやグループディスカッションを含む授業を実施する。また、受講者の研究領域の性質と関心に合わせて実地での体験活動や企業等と連携した授業も行う。		
評価方法及び評価基準	授業内のディスカッションへの貢献度（50%）、自身の担当する発表（50%）		
事前・事後学習の内容	すべての研究は先行研究の分析から出発する。当科目ならびに自身の研究テーマの研究動向に対して、普段から学術文献に触れる習慣を身につけてほしい。そのために毎授業、事前に2時間程度、事後に2時間程度、読書時間を確保すること。		
履修上の注意	内容や受講者の関心に合わせて進行を変更する可能性がある。調査や文献収集・分析等、授業時間外での研究作業を必要とする。		
テキスト	授業内容や受講者の関心に即して指定する。		
参考文献	<p>野上暁『子ども学 その源流へ——日本人の子ども観はどう変わったか』大月書店、2008年</p> <p>佐藤忠男・山村賢明編『児童の理解1——現代社会と子ども』東洋館出版社、1970年</p> <p>『岩波講座 子どもの発達と教育2——子ども観と発達思想の展開』岩波書店、1979年</p>		

科目名	家族社会学特論	副題	
担当者	小玉 亮子		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>家族が歴史的構築物であることが認識されるようになり、それまでの家族を本質から語るような議論ではなく、家族を社会的構築物としてみなす、いわゆる家族社会学のパラダイム転換が起こった。そして、そこから近代以降において子どもに対する家族と学校の影響力は歴史的に未だかつてないほど強力なものとなったことがあきらかにされてきた。しかし、近代以降の家族と学校はいつでも期待される機能を十全に果たし得るとは限らない、家族と学校はそれぞれ課題に直面し、両者の関係は、複雑に問題を抱えることとなった。こういった家族と学校の複雑な関係に焦点を当てて、幼児教育を視野にいれながら家族の問題について社会学的に分析する。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>社会学的な家族認識を学び、家族をマクロな視点及びミクロな視点から分析することによって、自らが無意識のうちにもつ家族観が普遍のものではないことを学び、自らの家族観を相対化することを試みる。</p> <p>同時に、家族について学校や地域との関係に焦点を当てて、家族が単独のシステムとしてあるのではなく、グローバル化が進む社会にあって、様々なシステムと相互的に存在していることを理解する。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	家族を論じるために		
2	家族問題は何が問題か		
3	家族社会学のパラダイム転換（家族形態から）		
4	家族社会学のパラダイム展開（家族関係から）		
5	近代家族とは何か		
6	近代家族と子ども		
7	近代家族とジェンダー		
8	社会変動の中の家族と教育（日本）		
9	社会変動の中の家族と教育（世界）		
10	子どもの発達と家族		
11	家族と学校の連携		
12	地域社会と家族		
13	グローバル社会と家族（途上国）		
14	グローバル社会と家族（先進国）		
15	家族のゆくえ		
期末			
授業に関する連絡	<p>社会における家族イメージを知るために、幼児教育と家族に関する新聞等の報道に注意しておくことは授業を受ける上で有益となる。</p>		
評価方法及び評価基準	<p>授業への参加及び、小レポートと研究発表を元に総合的に評価する。</p>		
事前・事後学習の内容	<p>事前に授業前の課題を伝えるので、その課題に取り組むこと。 授業後には、各自の問題意識に沿ったまとめを行うこと。</p>		
履修上の注意	<p>各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って授業に参加すること。</p>		
テキスト	<p>小玉亮子編(2020)『幼児教育』ミネルヴァ書房</p>		
参考文献	<p>藤崎宏子・池岡義孝編『現代日本の家族社会学を問う』ミネルヴァ書房 小玉亮子編(2017)『接続期の家族・園・学校』東洋館出版社</p>		

科目名	子ども政策特論	副題	
担当者	渡邊 英則(実)		
開講期	後期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	平成27年度から国の子どもや子育てに関する制度が大きく変わった。これまで縦割り行政で分かれていた幼稚園と保育所を、幼保連携型認定こども園という一つの制度としていく動きもこの制度改革の大きな柱になっている。また平成30年度からの学習指導要領改訂の動きは、小中学校の学習指導要領の改訂だけでなく、幼稚園や保育所、認定こども園も含め、日本の教育のあり方を大きく変えようとする改訂になっている。また幼児教育・保育の無償化が始まり、幼児教育と小学校教育の架け橋プログラムの検討も始まり、保育の質が問われる動きもでてきた。このような社会の動きや制度改革を見据えながら、実践する側の立場から、本来、求めるべき幼児教育・保育の姿を探求する。		
授業のねらい・到達目標	1. 制度が大きく変わるときに問われるのは理念である。国際的な幼児教育・保育の流れを見据えながら、日本の幼児教育・保育は、どのような制度になっていて、何か課題なのか等について、保育の実態も踏まえながら様々な視点から検討ができる力を養う。 2. 理念を具体的な実践として実現していく方法や考え方を獲得していく。		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス		
2	OECDの調査・提言について～世界の乳幼児教育の流れを中心に～		
3	子ども・子育て支援新制度について ～新たな制度がめざす方向とは～		
4	学習指導要領の改訂について		
5	幼稚園制度の基本的な考え方と課題		
6	保育園制度の基本的な考え方と課題		
7	認定こども園制度について（1）～制度と仕組み～		
8	認定こども園制度について（2）～実際の保育を中心に～		
9	保育の質について（1）		
10	保育の質について（2）		
11	幼保小連携について		
12	特別支援教育について		
13	海外の保育制度について		
14	実践を深めていくために必要な視点とは何か		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では履修生にレジュメの作成・発表を課す。第2回目から第15回目までテーマに応じてグループディスカッションを行う予定。		
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題（50%）を基に総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分に自分の考えを整理すること。		
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。		
テキスト	Peter Moss他著『保育の質を超えて』ミネルヴァ書房、2021年		
参考文献	佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2013年 カルナ・リナルディー著、里見実訳『レッジョ・エミリアと対話しながら』ミネルヴァ書房、2019年		

科目名	教育学特殊研究	副題	
担当者	米山 光儀		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	「教育とは何か」という問いに対して、どのように答えるだろうか。この講義の前半では、これまでなされてきた教育の定義について検討し、新たな教育の定義を試みる。さらに、これまでの教育学の歩みを知るために、『原典による教育学の歩み』を読み、教育学の古典と向き合う時間を設ける。		
授業のねらい・到達目標	(1) 教育とは何かを自分のことばで語るができるようになる。 (2) 教育学の基本的な文献を読み、教育学の歩みを知る。		
授業の方法・授業計画			
1	イントロダクション		
2	教育はどのように定義できるか。(講義)		
3	国語辞書の「教育」を検討する(講義)		
4	教育事典の「教育」を検討する①(講義と演習)		
5	教育事典の「教育」を検討する②(講義と演習)		
6	教育の新しいモデルの提起(講義と演習)		
7	教育のパラドックス(講義と演習)		
8	『原典による教育学の歩み』を読む①(演習)		
9	『原典による教育学の歩み』を読む②(演習)		
10	『原典による教育学の歩み』を読む③(演習)		
11	『原典による教育学の歩み』を読む④(演習)		
12	『原典による教育学の歩み』を読む⑤(演習)		
13	『原典による教育学の歩み』を読む⑥(演習)		
14	『原典による教育学の歩み』を読む⑦(演習)		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	授業は、講義と演習の両形式で行う。前半は講義と演習、後半は演習で行う。演習ではグループディスカッションや参加者がレジュメを作成し、発表するなどのことを行う。		
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート(50%)及び発表(50%)を基に評価する。		
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。		
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。		
テキスト	沼野一男・田中克佳・松本憲・白石克己・米山光儀『教育の原理』第4版、学文社 村井実編『原典による教育学の歩み』、講談社		
参考文献	適宜、授業で紹介する。		

科目名	子ども環境学特論	副題	
担当者	仙田 考		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1年次・2年次
授業の概要	<p>現在の幼稚園教育の基本理念である「環境を通しての保育」の意義と在り方、またその実践について学ぶために、子どもと環境との関係、特に子どもと環境との相互関係に着目し、その発達過程と育成に必要な環境のあり方を論ずる。その際、今日の子どもたちを取り巻く環境の激変が、未来を担う子どもたちに与える影響を考察し、その課題を整理した上で、子どもの豊かな発達を支える保育環境や子どもに活力を与える社会環境の構築に必要な要素を検討する。子どもの視点から見た環境の捉え直しを横断的・学際的に検討する。また幼稚園等の保育現場を訪れ、保育の方法や実践について考える機会も持つ。</p> <p>子ども環境学とは何かからはじめ、とくに子どもの遊び環境を中心的に取り上げながら、遊び空間の在り方、住まいの問題、安全な環境づくり、幼児教育施設、学校、医療環境、児童館・環境学習施設などの地域施設の現状などについて検討を進める。その上で、子どものための、子育てがしやすい街・都市づくりの在り方を展望し、子どもや子育て家庭を支える保育・教育実践のあり方を幅広い視点から考える。</p>		
授業のねらい・到達目標	<p>学生が、子どもがひと・もの・自然・場・社会などさまざまな環境と関わる活動や子どもや子育てのための環境について、座学とともに、関連分野の専門家の話や、幼稚園等保育現場の見学等を通して、子どもと環境との関係や、子どもの発達に寄与する環境のあり方を理解し、子どもや子育てにとってよりよい環境とはなにかを、学び考えることを目標とする。</p>		
授業の方法・授業計画			
1	子ども環境学とは何か - 幼稚園教育における「環境を通しての保育」とは		
2	子どものあそび環境（1） - 子ども時代のあそび環境、生活環境		
3	子どものあそび環境（2） - 時間、空間、集団、方法～遊環境構造、あそび環境におけるリスクとハザード		
4	子どもと保育環境（1） - 乳幼児と領域環境		
5	子どもと保育環境（2） - 園舎、園庭環境、保育と環境の構成		
6	子どもと自然 - 身近な自然にふれてみよう、感じてみよう		
7	子どもと園・地域の環境（1） - 子どもの環境に関する現状、課題についての発表		
8	子どもと園・地域の環境（2） - 子どもの環境に関する現状、課題についての発表、討論		
9	子どもと地域 - 子育て支援の環境		
10	子どもと環境学習 - 自然、環境への気づきから持続発展教育へ		
11	子どものための環境づくり（1） - 子どもにやさしい園環境づくり・まちづくりの在り方に向けて		
12	子どものための環境づくり（2） - 子どもにやさしい園環境づくり・まちづくりの在り方に向けて		
13	子ども環境施設等の視察（1） - 乳幼児教育施設や子育て支援施設等の園舎、園庭、環境構成		
14	子ども環境施設等の視察（2） - 乳幼児教育施設や子育て支援施設等の園舎、園庭、環境構成		
15	子ども環境施設等の視察（3） - 乳幼児教育施設や子育て支援施設等の園舎、園庭、環境構成		
期末			
授業に関する連絡	本授業では講義や演習、学外研修等を取り入れて行う。 第2, 6, 8, 11, 12, 13, 14, 15回はグループディスカッションを実施する。		
評価方法及び評価基準	授業での発表・課題（50%）及びレポート（50%）を総合的に判断し評価する。		
事前・事後学習の内容	公園や児童館など子ども施設に足を運んで、実際の子ども施設がどのように作られ、使われている状況などを観察しながら、年齢や都市環境に応じたどのようにあるべきかを考察してほしい。		
履修上の注意	各自の問題意識に基づいて授業での討論や視察に積極的に参加すること。		
テキスト	特になし		
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領』, 2017年、文部科学省『幼稚園施設整備指針』, 2022年、仙田満『子どもとあそび』岩波新書, 1992年、仙田満・藤塚光政『幼児のための環境デザイン』世界文化社, 2003年、仙田満『こどもの庭』世界文化社, 2015年 ほか授業内で紹介		

科目名	発達心理学特論	副題	
担当者	横尾 暁子		
開講期	前期	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	<p>人間の生涯にわたる発達・成長のなかで、人生初期はその基盤となる重要な時期であると考えられている。本授業では、主に乳幼児期・児童期の子どもの心理学的発達をテーマとして扱い、国内外における研究成果について学ぶ。</p> <p>受講者は発達心理学分野の最新の論文の中から、各自関心のあるものを選び概要をまとめた上で、自身の考察や問題意識とともに発表する。論文および発表内容については、全員で討議を行う。</p>		
授業のねらい ・到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・発達心理学の最新の研究成果を学び、子どもの育ちを多面的に理解する。 ・子どもの生涯の発達を見通し支えるために、発達心理学の研究成果を実践の場面でどのように応用できるかについて考える。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス（発達心理学とは何か、発達心理学の歴史）		
2	発達理解の意義、発達心理学の研究法		
3	研究計画と心理統計		
4	発達の基盤 - 遺伝と環境 -		
5	愛着の発達		
6	認知発達 - 表象の発達と概念の発達 -		
7	認知発達 - 言語発達と社会的認知の発達 -		
8	道徳性の発達		
9	レジリエンス		
10	食行動の発達		
11	仲間関係の発達		
12	自己認知の発達		
13	問題解決行動の発達		
14	親子関係の発達 - 養育態度と発達 -		
15	振り返りとまとめ		
期末			
授業に関する 連絡	本授業は内容に応じて、講義と演習の両形式で行う。 第2回から第10回は講義に加えてグループディスカッションを予定している。第11回から第14回は履修生が各授業のレジюмеを作成し、発表、グループディスカッションを含む授業を実施する。		
評価方法 及び評価基準	授業内での発表および討議（50%）、最終レポート（50%）に基づいて評価する。		
事前・事後 学習の内容	<p>事前：各回の授業のテーマについて、関連する基礎的な知識を確認し、自分の考えをまとめておくこと。また、配布資料や指定の文献等によく読んでおくこと。発表担当の場合は、資料を準備すること。</p> <p>事後：各回の学習内容を整理すること。各自の問いや疑問点についてはさらに調べるなどして、学びを自ら深めていくことが望ましい。</p>		
履修上の注意	履修生の積極的な参加を求める。		
テキスト	未定		
参考文献	<p>外山紀子・中島伸子 『乳幼児は世界をどう理解しているか』 新曜社 2013</p> <p>伊東暁子・竹内美香・鈴木晶夫 『食べる・育てる心理学』 川島書店 2010</p> <p>川田学 『保育的発達論のはじまり』 ひとなる書房 2019</p> <p>小塩真司 他 『非認知能力：概念・測定と教育の可能性』 北大路書房 2021</p>		

科目名	保育・教育課程研究	副題	
担当者	宮里 暁美		
開講期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	<p>幼児期の学びを支える保育は、生涯にわたる人格形成の基盤となる重要なものである。その保育を支えているものが「保育・教育課程」である。一人一人の子どもの現状や課題を丁寧に見出し、次なる経験に繋がる保育の活動や環境をデザインしていく保育・教育過程の実際について、文献や実践を通して検討する。保育・教育課程の展開を支える保育マネジメントの在り方や、保育・教育課程を実施していく保育者の在り方、実際の保育場面の中に見られる保育・教育課程の実際などに視点を置き、「問いかける」「問う」というアプローチを取りながら学びを深める。</p>		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 幼児期の教育課程の特色について検討し、豊かな経験を生み出すための保育・教育課程を構成するポイントを理解する。 2. 具体的な幼児の姿の背景に、保育・教育課程が存在していることを確認し、計画から保育へ、保育の省察から計画へ、という循環を支える営みについて明らかにする。 3. 遊びの中の学びに着目し、学びを生み出す、教育課程の編成方法を構想する。 		
授業の方法・授業計画			
1	講義・討議	乳幼児教育の在り方を問う：子どもの「やりたい！」が発揮される保育の実現	
2	講義・討議	乳幼児教育の在り方を問う：幼児期に育みたい資質・能力3つの柱	
3	講義・討議	乳幼児教育の在り方を問う：海外の実践例から	
4	文献研究	子どもたちからの贈り物 レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践①	
5	文献研究	子どもたちからの贈り物 レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践②	
6	文献研究	子どもたちからの贈り物 レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践③	
7	保育観察①	保育の実際の中に身をおいたからこそその気づきをまとめる	
8	保育観察②	保育の実際の中に身をおき、自己課題に応じた学びを深める	
9	発表・討議	保育の実際から気づいたことについて	
10	発表・討議	保育の実際の中にある意味を深める	
11	発表・討議	保育とは何か？	
12	ワークショップ	暮らし・創る・保育教育課程①	
13	ワークショップ	暮らし・創る・保育教育課程②	
14	討議	豊かな経験を生み出す保育・教育課程の編成について	
15	講義	学びの振り返りとまとめ（課題レポート提出）	
期末			
授業に関する連絡	全回を通じて保育・教育課程研究に関する課題発見・検討型の学習活動を行う。第7回～第15回は学生による実地見学、発表と討議、ワークショップを行う。		
評価方法及び評価基準	<p>事例分析や討議への参加意欲：40%</p> <p>資料準備及び提案内容：30%</p> <p>課題レポート：30%</p>		
事前・事後学習の内容	<p>事前：国内外の特色ある保育・教育課程については、各自で資料を探し提案準備を行う</p> <p>事後：授業内容を整理し、学びを深める。必要に応じて、資料整理を行う。</p>		
履修上の注意	特になし		
テキスト	<p>子どもたちからの贈りもの レッジョ・エミリアの哲学に基づく保育実践 カンチェーミ・ジュンコ 秋田喜代美 編著 萌文書林</p>		
参考文献	<p>エドガー・H・シャイン『問いかける技術』栄治出版 宮里暁美『耳をすまして目をこらす～いろとりどりの子どもの気持ち』赤ちゃんとママ社2021年 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレール館, 2018年、厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレール館, 2018年</p>		